

なっている系統樹的な思考を理解する上で、側に置いておき

たい図書の一つである。

(白井 滋)

会員通信 · News & Comments

魚類学雑誌
54(1): 91-92

新知見紹介

トウゴロウイワシ科ヤクシマイワシ属 *Atherinomor*
lacunosus と *Atherinomor*
pinguis の標準和名

Standard Japanese names of two atherinid fishes,
Atherinomor
lacunosus and *Atherinomor*
pinguis

Atherinomor
lacunosus (Forster) と *Atherinomor*
pinguis (Lacepède) は、ともに本邦を含むインド洋-太平洋のほぼ全域に分布する。両種はよく類似し、従来からしばしば混同され、近年では同一種とされてきた (Ivantsoff and Crowley, 2000 など)。筆者らは現在知られている両種の全分布域から得られた多くの標本に基づき、これらがそれぞれ別の有効種であることを明らかにした (Kimura et al., 2007)。この論文では、*Atherinomor*
lacunosus には瀬能 (2000) と同様「ヤクシマイワシ」の標準和名を与え、一方 *Atherinomor*
pinguis には「ホソオビヤクシマイワシ」を新たに提唱した。しかし、その根拠については説明されていなかった。本報告では、両種の標準和名について、その根拠を説明する。本報告に対して、コメントを頂戴した鹿児島大学総合研究博物館の本村浩之博士および匿名の査読者に対し、厚く御礼申し上げる。

「ヤクシマイワシ」は、タイプ産地が屋久島である *Atherina morrisi* Jordan and Starks に対し命名された「ヤクイソイワシ」(Jordan, Tanaka and Snyder, 1913) が元になり、その後、岡田・松原 (1938) によって、この種に対して新称とされたものである。Kimura et al. (2007) は両名義種のタイプ標本に基づいて、*Atherina morrisi* は *Atherinomor*
lacunosus の新参シノニムであると結論づけた。したがって *Atherinomor*
lacunosus の標準和名には、その新参シノニムである *Atherina morrisi* に対して提唱されたヤクシマイワシ用いるのが妥当であると判断された。

松原 (1955) は日本産ヤクシマイワシ属魚類として、ヤクシマイワシ *Pranesus morrisi* とナンヨウトウゴロウ *Pranesus insularum* の2種を認めた。しかし現在までの筆者らの調査では、*Atherinomor*
insularum (Jordan and Evermann) は日本近海から採集されていない。また松原

(1955) の検索表を使うと、*Atherinomor*
pinguis やネットアイソイワシ *Atherinomor*
duodecimalis (Valenciennes) のほか、*Atherinomor*
lacunosus の一部も「ナンヨウトウゴロウ」に同定される。

「ナンヨウトウゴロウ」は、瀧澤 (1942) によると、田中 (1927) によって命名されたとされている。田中 (1927) は、台湾産の1標本を *Atherina insularum* と同定し、再記載した。この再記載は *Atherinomor*
pinguis やネットアイソイワシと比較的よく一致した。また本標本の図では、口は小さく、上顎の後端は眼の前縁に達する程度であり、この特徴はネットアイソイワシと類似している。しかし、本標本の第1背鱗は7棘とされ、*Atherinomor*
pinguis の4-6本 (60個体; Kimura et al., 2007) やネットアイソイワシの5-6本 (68個体; Kimura et al., 2001) との相違もみられる。

このように、田中 (1927) の「ナンヨウトウゴロウ」は完全には一致しないもののネットアイソイワシである可能性があること、松原 (1955) の「ナンヨウトウゴロウ」は複数種が該当し、種を明確に特定できないことなどから、*Atherinomor*
pinguis に「ナンヨウトウゴロウ」を用いることは、明らかに不適當である。また、これ以外にもこの種に与えられたと特定できる和名はないと判断されたため、Kimura et al. (2007) は *Atherinomor*
pinguis に対し「ホソオビヤクシマイワシ」という新標準和名を与えた。

引用文献

- Ivantsoff, W. and L. E. L. M. Crowley. 2000. Atherinidae. Silversides (or hardyheads). Pages 2113-2139 in K. E. Carpenter and V. H. Niem, eds. FAO species identification guide for fishery purposes. The living marine resources of the Western Central Pacific, Vol 4. FAO, Rome.
- Jordan, D. S., S. Tanaka and J. O. Snyder. 1913. A catalogue of the fishes of Japan. J. Coll. Sci. Tokyo Imp. Univ., 38: 1-497.
- Kimura, S., D. Golani, Y. Iwatsuki, M. Tabuchi and T. Yoshino. 2007. Redescriptions of the Indo-Pacific atherinid fishes, *Atherinomor*
forskali, *Atherinomor*
lacunosus, and *Atherinomor*
pinguis. Ichthyol. Res., 54: 145-159.
- Kimura, S., Y. Iwatsuki and T. Yoshino. 2001. Redescriptions of the Indo-West Pacific atherinid fishes, *Atherinomor*
endrachtensis (Quoy and Gaimard, 1825) and *A. duodecimalis* (Valenciennes in Cuvier and Valenciennes, 1835). Ichthyol. Res., 48: 161-177.
- 松原喜代松. 1955. 魚類の形態と検索I. 石崎書店, 東京. xi+789 pp.
- 岡田彌一郎・松原喜代松. 1938. 日本産魚類検索. 三省堂,

東京, xi+584 pp.
 瀬能 宏, 2000. トウゴロウイワシ科 Atherinidae silversides. 中坊徹次 (編), pp. 542-544. 日本産魚類検索全種の同定, 第二版, 東海大学出版会, 東京.
 澁澤敬三, 1942. 日本魚名集覧, 第1部, アチックミュージアム, 東京, 490 pp.
 田中茂徳, 1927. 233 ナンヨウトウゴロウ, 日本産魚類図説, 第38巻, 丸善, 東京, pp. 709-740.

(木村清志 Seishi Kimura: 〒517-0703 志摩市志摩町和具4190-172 三重大学大学院水産実験所 e-mail: kimura-s@bio.mie-u.ac.jp; 岩槻幸雄 Yukio Iwatsuki: 〒889-2192 宮崎市学園木花台西1-1 宮崎大学農学部 e-mail: yuk@cc.miyazaki-u.ac.jp; 吉野哲夫 Tetsuo Yoshino: 〒903-0213 沖縄県西原町千原琉球大学理学部 e-mail: b985005@sci.u-ryukyuu.ac.jp)

魚類学雑誌
54(1): 92

カジカ科オキカジカ属 (Cottidae: *Artediellus*) 2種の標準和名

Standard Japanese names for two cottid fishes, *Artediellus*

Inagawa and Yabe (2006) は北海道の枝幸沖オホーツク海から採集された *Artediellus aporosus* Soldatov, 1921 を日本初記録種として報告した, しかし, 和名の提唱がなされなかったため, 本種の標準和名として「マダラオキカジカ」(新称) を提唱する.

本種は Schmidt (1927) により *A. miacanthus* Gilbert and Burke, 1912 の新参シノニムとされたが, Neyelov (1979) は有効種として認め, Inagawa and Yabe (2006) も同様の見解を示した. 岡田・松原 (1938) は Schmidt (1927) を引用してオキカジカ属の検索表を示し, その中で *A. miacanthus* に対して「ヨメカジカ」の和名を与えた. このため, 「ヨメカジカ」は新参シノニムとされた本種を含む *A. miacanthus* に与えられたことになる. この学名と和名の関係は, 松原 (1955) および上野 (1971) に踏襲された. しかし, *A. miacanthus* は日本には生息せず, *A. aporosus* も Inagawa and Yabe (2006) により日本初記録種として報告されたため, 「ヨメカジカ」は両種いずれかの日本産の標本に対して命名されたものではない. 以上を踏まえ, 学名・和名間の関係の混乱を防ぐために, 「ヨメカジカ」を *A. miacanthus* の和名として残し, *A. aporosus* に対して「マダラオキカジカ」を提唱した.

引用文献

Inagawa, R. and M. Yabe. 2006. A rare cottid fish, *Artediellus aporo-*

sus (Actinopterygii: Cottoidei: Cottidae), from the Sea of Okhotsk off Hokkaido, Japan. Spec. Div., 11: 191-198.

松原喜代松, 1955. 魚類の形態と検索 I-III. 石崎書店, 東京, 1605 pp.

Neyelov, A. V. 1979. Seimosensory system and the classification of sculpins (Cottidae: Myoxocephalinae, Artediellinae). Nauka, Leningrad. 208 pp (in Russian).

岡田彌一郎・松原喜代松, 1938. 日本産魚類検索, 三省堂, 東京, xi+584 pp.

Schmidt, P. Y. 1927. A revision of the cottid fishes of the genus *Artediellus*. Proc. U. S. Nat. Mus., 71: 1-10.

上野達治, 1971. 北海道近海産魚類目録. 北海道立水産試験場報告, 13: 61-102.

(稲川 亮 Ryo Inagawa: 〒041-8611 函館市港町3-1-1 北海道大学大学院水産科学院海洋生物学講座 (魚類体系学) e-mail: inagawa@fish.hokudai.ac.jp; 矢部衛 Mamoru Yabe: 〒041-8611 函館市港町3-1-1 北海道大学大学院水産科学研究所海洋生物学分野 e-mail: myabe@fish.hokudai.ac.jp)

魚類学雑誌
54(1): 92-93

日本から採集されたハゼ科アワイロコバンハゼ (新称)

Voucher specimen of a goby, *Gobiodon prolixus* Winterbottom and Harold, 2005, from Japan

Winterbottom and Harold (2005) は, インド・太平洋の広い範囲から得られた18個体の標本を基に, ハゼ科コバンハゼ属の新種 *Gobiodon prolixus* を記載した. 本種が本邦水域に分布することはすでにその原記載でも指摘されているが, タイプ標本中に日本産個体が含まれているわけではなく, 根拠は鈴木 (2004: 178) が報告した「コバンハゼ属の1種-2」の水中画像 (矢野維幾氏撮影) に基づくものであった.

今回, 国立科学博物館所蔵の沖縄県石垣島産標本1個体 (NSMT-P 49476) を検討した結果, いずれの特徴においても *Gobiodon prolixus* の原記載とほぼ完全に一致し, 同種とみなしうることが確認された. 本種は, ①生鮮時, 地色は茶色か淡茶色で, 頭部側面から胸鰭基部にかけて5本の細い淡青色垂線をもつ, ②成魚の体が本属魚類としては比較的細長く, 腹鰭棘基部前端部における体高は体長の27.1-35.8% (今回の観察標本では27.8%), 背鰭基底前端部から胸鰭最上鰭条の基部背前端部までの距離は頭長の41.3-50.4% (同, 41.1%), という特徴の組み合わせにより, 同属他種と区別される (Winterbottom and Harold, 2005).

生鮮時, 頭部側面から胸鰭基部にかけて5本 (あるいはそれ以上) の細く明瞭な淡青色の垂線が入るコバンハ



図1. アワイロコパンハゼ *Gobiodon prolixus* (NSMT-P 49476, 標準体長20.3 mm)。

ゼ属魚類は、本種の他にも複数種が知られる。Winterbottom and Harold (2005) は、*Gobiodon prolixus* に似た斑紋パターンを示すものとして、フタイロサンゴハゼ *Gobiodon quinquestrigatus* Valenciennes in Cuvier and Valenciennes, 1837 と *Gobiodon rivulatus* (Rüppell, 1830) を挙げた。その他、日本から報告されている学名(種小名)未定の3種、すなわちタスジコパンハゼや鈴木(2004)の「コパンハゼの1種-5」および「コパンハゼ属の1種-8」も、やはり同様の特徴をもつ。[註：*G. rivulatus* と上記3学名未定種との関係は現在のところ不明確であり、学名の決定にはさらに検討が必要だが、今回の報告とは趣旨が異なるため、ここでその詳細は述べない。Munday et al. (1999) や Jürgen and Hilgers (2005) も参照のこと]。しかしながらこれらの種はいずれも *G. prolixus* に比べて体高が高く、体の輪郭は眼から背鰭にかけてよく盛り上がっており (*G. prolixus* でもごくわずかに盛り上がるが、むしろ直線状)、背鰭基底前端部から胸鰭最上鱗条の基部背前端部までの距離がより長く、尾柄高に対して体高や頭高が顕著に高い (*G. prolixus* ではそれほど高くなく、体形は全体的にやや側扁した円筒形にちかい)。また、多くの場合、頭部側面や胸鰭基部後方に5本の主線に加えて幾本ものより細い淡青色の垂線が入り (*G. prolixus* では一切入らない)、ふつう成魚の体色がより暗色がかかること等でも *G. prolixus* と異なる (Winterbottom and Harold, 2005; 本研究)。

Winterbottom and Harold (2005) も指摘しているように、フタイロサンゴハゼの稚魚は *Gobiodon prolixus* に似た淡く透明感の強い体色を示すものが多い。しかし、前種は稚魚でもやはり後種に比べ体高が高く、尾柄高に対する体高比や頭高比もより大きい傾向があることで区別できる (鈴木、未発表)。なお Winterbottom and Harold (2005: fig. 3) が図示した *G. prolixus* のパラタイプは、体高が高く、体の輪郭が眼から背鰭にかけてよく盛り上がっており、頭部に入る淡青色垂線の入り方や太さが異なる等の点から、実際にホロタイプと同一種であるのか疑わしい。

Gobiodon prolixus にはこれまで和名が提唱されていなかったため、今回観察した標本 (NSMT-P 49476) に基づき、成魚の独特な淡い体色にちなむ新標準和名「アワイロコパンハゼ」を提唱する。

観察標本 NSMT-P 49476, 1個体, 標準体長20.3 mm, 沖縄県八重山郡石垣島浦底湾, 水深9 m, 1995年12月12日, 篠原現人・渋川浩一採集。

引用文献

- Jürgen, H. and H. Hilgers. 2005. A synopsis of coral and coral-rock associated gobies (Pisces: Gobiidae) from the Gulf of Aqaba, northern Red Sea. *Aqua, J. Ichthy. Aquat. Biol.*, 10: 103-132.
- Munday, P. L., A. S. Harold and R. Winterbottom. 1999. Guide to coral-dwelling gobies, genus *Gobiodon* (Gobiidae), from Papua New Guinea and the Great Barrier Reef. *Revue fr. Aquariol.*, 26: 53-58.
- 鈴木寿之, 2004. コパンハゼ属の1種-2, コパンハゼ属の1種-5, コパンハゼ属の1種-8. 瀬能 宏 (監) pp. 178, 180, 182. 決定版日本のハゼ. 平凡社, 東京.
- Winterbottom, R. and A. S. Harold. 2005. *Gobiodon prolixus*, a new species of gobiid fish (Teleostei: Perciformes: Gobiidae) from the Indo-west Pacific. *Proc. Biol. Soc. Wash.*, 118: 582-589.

(渋川浩一 Koichi Shibukawa; 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部 e-mail: shibu@kahaku.go.jp; 鈴木寿之 Toshiyuki Suzuki; 〒611-0047 兵庫県尼崎市西昆陽3-38-1 尼崎北高等学校; 篠原現人 Gento Shinohara; 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部 e-mail: s-gento@kahaku.go.jp)

魚類学雑誌
54(1): 93-96

トピックス

第3回シマドジョウ属とその近縁な属に関する国際学会 3rd International Conference Loaches of the genus *Cobitis* and related genera 24-29 September 2006, Šibenik, Croatia

シマドジョウ属魚類はユーラシア大陸およびその周辺地域に自然分布し、美しく複雑な模様を有するコイ目ドジョウ科の一群である。地理的に染色体数や形態を複雑に変化させ、異種間交雑由来の集団も確認されているなど興味深い性質を持ち、種分化のモデル種として注目されている。しかし、いまだにどの地域にどのような種類が分布しているのか、といった基礎的な知見も不足しており、形態・模様が変異に富むことから分類が困難で未記載種が多く存在していることも問題となっている。そんな「シマドジョウ」に魅せられた研究者たちが一同に介する「シマドジョウ属とその近縁な属に関する国際学会」が2006年9月24日から29日の6日間、クロアチアの地方都市シベニクにおいて開催された。本国際学会は、第1回が1999年にチェコのブルノで、また第2回が2002

年にポーランドのオルシュチンで開催されており、今回が第3回大会となる。今回の大会には、ヨーロッパ、アジアを中心とした15ヶ国から50名ほどの参加があり、日本からは齊藤憲治（東北水産研究所）、荒井克俊（北海道大学）の両氏と筆者（九州大学院生）の3名の参加となった。魅力的なシマドジョウ属魚類が多数分布する東アジア地域からの参加者は日本からの3名の他にはなく、やや寂しい気がした。

今回学会が開催されたクロアチア、正式にはクロアチア共和国というこの国は日本ではあまり馴染みのない国である。サッカーファンの方は、ワールドカップにおいて2回も同じ組に入って戦った国、ということで覚えておられるだろうか。クロアチア共和国は、旧ユーゴスラビアから1991年に独立した比較的新しい国家である。旧ユーゴスラビアは1991年から2006年にかけて、クロアチアのほかにスロベニア、マケドニア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビア、モンテネグロの6つの国に分離し、その都度、紛争が起こっている。現在のクロアチアは経済的にも比較的豊かで安定しており、空港や高速道路などもきれいに整備されている。学会会場となったシベニクはクロアチアの首都ザグレブから300 kmほど離

れた、地中海はアドリア海に面した歴史ある小さな港町である。イタリア半島とバルカン半島に挟まれたアドリア海といえば、古来よりの景勝地であり観光地である。したがって、平和を取り戻したクロアチアのアドリア海沿岸地域へは、ヨーロッパを中心に世界中から多くの観光客が足を運ぶ。現在、日本からクロアチアには直行便はなく、日本から訪れるにはヨーロッパの他の国際空港を経由せねばならない。筆者は、フランス経由でクロアチアの首都ザグレブへ向かうコースを選択した。首都ザグレブから開催地シベニクまでは前述したように300 kmもあるため、どう移動したものかと直前まで案案していたのだが、学会の幹事をしておられたLinda Zanella女史及びDavid Zanella氏（彼も淡水魚の研究者である）がザグレブからシベニクまで車で連れて行って下さった。

学会会場のホテルは、やや古いものの開放感のあるリゾートホテルで、その眼前はアドリア海の美しいビーチである。9月下旬でも昼の気温は20°C以上に達するため、多くの人が日光浴あるいは海水浴を楽しんでいた。前述したように、学会の会期は9月24日~29日であるが、24日は受付と簡単なウエルカムレセプションのみである。研究発表は25日から29日の午前中までで、27日が1日中エクスカージョンというスケジュールである。24日はウエルカムレセプションのあと夕食まで時間があいている。仕方ないので、ホテル屋外の椅子でアドリア海の風を受けて呆けていたところ、目の前をルーマニアのNalbant博士が通り掛かった。ドジョウ類・コイ類好きなら当然どこかで目にする可能性がある名前のその人が目の前に！ 実は今回のシマドジョウ学会に来るにあたって、ぜひお会いしたいと考えていたのがNalbant博士であったのである。ここぞとばかりに、(たどたどしい英語ではあるが)話しかけ、サインも頂いた。大変気さくにゆっくりと色々とお話をして下さり、感激の一言である。

夕食後は初日から、クロアチア、ドイツ、チェコなどの同世代の学生と夜遅くまでワインやビールを飲みながら淡水魚や研究について色々な話をする事ができた。結局、彼らとは学会期間中毎晩、夜遅くまで飲みながら話をする事になったのだが、英会話の苦手な筆者が何故、存分に異国の学生と飲み、語り合う事ができたのだろうか？ 後から考えるに、その理由は2つあったものと考えている。まず1つ目の理由として、“シマドジョウ学会”などというタイトルからわかるように、非常にマニアックな学生が多かったことが挙げられると思う(たまたま今回だけでもないが……)。魚好きな学生が多いことから、飲みながらの会話も必然的にどんな風に魚採りするのか、とかどんな魚がどんな所にいるのか、とかいうことが中心となっていた。筆者は小さい頃から無類の淡水魚好きであったため、研究に関係ない分野であれども、有名な世界の淡水魚の学名と、日本に産するコイ目魚類の学名がそこそこ頭に入っていた。そのような知識が会話を広げる上で大変役にたった。2つ目の理



参加者に配られたオリジナルシマドジョウキャップとバッジ



白熱する議論

由として、英語を母国語として話す人がほとんどいなかったことが挙げられる。ほぼ全員が非ネイティブであるため、かなりゆっくりとわかりやすくしゃべってくれるのである。ヨーロッパ人同士でも母国が違う者同士ではしばしば聞き返したりしていたので、酔ってはいても丁寧な英語で会話をするのが普通となっていた。以上2つの理由から、何とか会話が出来たのであろうと分析している。とりあえず、どこの国にも魚の好きな若い人がいるのだなあということを知ることが出来、また年齢の近い学生達と酒を飲みながら淡水魚の話をする事が出来て、大変うれしく思ったのは言うまでもない。

2日目の25日は、午前10時に学会のオープニングセレモニーが行われた。その後…いきなりコーヒブレイクとなり、11時半から待望のスタートとなった。学会は毎日、9時から11時まで発表、コーヒブレイク後11時半から13時まで発表、昼休み後、15時から18時まで発表、といったスケジュールで行われた。研究発表以外のスケジュールはと言うと、25日夜はシベニク市街地観光および近郊レストランでディナー、26日夜は船でアドリア海に浮かぶ島に向かい、そのレストランでディナー、27日は1日中エクスカーションでKrka国立公園を見学、28日はリゾート内にあるダルメシア地方の古い村を再現したレストランでディナー、といった感じで、最終日の29日まで息つく暇もないほど、イベントが盛りだくさんな内容であった。日本の学会に慣れた身だと、休憩時間が多少…いやかなり長い印象である。しかしながら、初ヨーロッパの自分にとってはこのようなイベントがたくさんあるのは大変楽しかった。

研究発表はだいたいのテーマに沿った形で順番に行われた。今回の演題は、口頭発表が25題、ポスター発表が28題、さらにセミナーで数題の講演があった。発表内容は一部重複するが染色体やDNAに関するものが20題、分布に関するものが12題、生態・生活史に関するものが10題、分類・形態に関するものが8題、その他寄生虫や保全に関するものがあり、ドジョウ類に関して考えられる研究分野全般に渡る演題が揃っていたと言えよう。“シマドジョウ属とその近縁な種”というタイトルの学会であるが、シマドジョウ属周辺の種ばかりではなく、いわゆる“ドジョウ類”を取り扱ってれば良いという印象であった。口頭発表は持ち時間が30分ほどであったため、質疑応答も含めてじっくりと議論できる方式となっていた。また、ポスター発表も発表する時間には、チェアパーソンが一人つき、演者を一人一人回っていくという方式であったため、実質的にポスターを前にした口頭発表という感じであった。ちなみに、筆者は九州北部のシマドジョウ属魚類の分布パターンについてポスター発表を行ってきたが、一部某先生のお助けを借りたものの、無難に質疑応答を終えることができた。

全般的な発表の内容は、染色体数の変異がどのように行われるのかといった点、あるいは形態的・遺伝的に異



ディナーパーティーで披露されたシマドジョウ型ケーキ（大きい!!）



Krka川でエレクトリックフィッシングにより採集されたRiver blennyこと *Salaria fluviatilis*

なる集団が実際にどのような分布パターンを示しているのかといった点、に注目した研究発表を多く目にする事ができた。DNA解析技術の向上により、系統地理学的な視点の研究、あるいは系統分類学的な視点の研究も進んでいる印象であった。また、分布新知見、生活史や新種記載といった基礎的分野の研究も数多く発表されており、この分野の研究にもまだまだ多くの研究者が取り組んでいることがわかった。印象深かったのは、レッドリストに関する発表も数題あったことである。クロアチアを含め復興、発展の進む東ヨーロッパの国々では、開発による環境破壊から淡水魚類の減少が各地で起こっており、その影響は無視できないものとなりつつある。淡水魚類保全の問題が国際的にも重要なテーマであることを再認識した。28日午後のセミナーでは、Mechanisms and roles of asexual reproduction and polyploidy in loachesと題して、日本の荒井氏、斉藤氏も含む数名により講演が行われ、活発な議論、意見交換がなされ筆者も大変勉強になった。

今回の学会ではエクスカージョンとしてKrka国立公園のツアーがセッティングされていたので、筆者も喜んで参加した。アドリア海に流入するKrka川という大きな川を中心としたこの国立公園には、今なお多くの野生生物が生息し、雄大な風景を残している。ツアーは、船で川を廻り、ところどころにある観光ポイント（島や滝など）に立ち寄りというものであった。また、主催者であるザグレブ大学の先生方の計らいにより、エレクトリックフイッシャーによる魚類採集の実演も途中で披露された。これは高電圧刺激により魚を感電させて採集する装置であるが、ヨーロッパでは魚類採集調査には欠かせない必須のアイテムとなっているようである。途中のハイキングポイントでは、国立公園内に生息する動物を紹介する看板がところどころにたっていて（見つけたのは哺乳類、爬虫類、両生類、魚類のもの）どのような動物が公園内に生息しているのかを理解しやすい。魚類の看板には、Adriatic salmon (*Salmothymus obtusirostris krkensis*), Marble salmon (*Salmo marmoratus*), Brown trout (*Salmo trutta*), Dalmatian barbel gudgeon (*Aulopyge huegelii*), Three-spined stickleback (*Gasterosteus aculeatus*), Adriatic dace (*Leuciscus svallize*), European eel (*Anguilla anguilla*), River blenny (*Salaria fluviatilis*) の写真が名称（英名・クロアチア名・学名）とともに掲載されていた。また感銘を受けたのは哺乳類の説明看板で、オオカミ、ヤマネコ、ジャッカル、カワウソウ……と一通りの強力な捕食者が勢ぞろいしており、これらの哺乳類を直接見ることは出来なかったが、豊かな自然環境が維持されていることが伺われた。

さて、学会終了後、筆者はクロアチアの首都ザグレブで一泊した。これは帰りの飛行機の問題もあるのだが、せっかくなので首都を観光したいと思ったからである。行きと同様、Zanella 夫妻がシベニクからザグレブまで送って下さるということだったのでご厚意に甘えさせていただいた。翌朝に一人で市場を探索したところ、魚売り場では多くの海産魚に混ざって、淡水魚もかなり販売されていた。淡水魚の中で多く目についたのは、ニジマスやコイ（ドイツゴイ）などであったが、中には巨大なナマズの一種 *Silurus glanis* やバイクの一種 *Esox lucius* も並べて売られており、淡水魚好きな筆者にとっては大変な満足を得ることができた。内陸部にあるザグレブでは淡水魚食も日常であるようだ。

以上で、今回の報告は終了である。今回はじめて海外の国際学会に参加して、数々の貴重な経験、勉強ができた。日本人がほとんどいないような学会に行く機会は今までなかったが、得難い経験を多く積むことができた。同年代の異国の学生と研究や魚の話をする経験は他に代え難いものがあった。また、自分と同じようにシマドジョウあるいは淡水魚類が好きで、日夜研究している人たちが海外にもこれほどいるのだ、ということを実感して勇気付けられた思いもする。日本のシマドジョウ研究はまだまだやるべき部分が多く残っている、分類学的な部

分も含めて、もっと速度を上げて研究を進めていくことがこの先とても大切であるだろう。次回の大会にも参加できるように、今後もどんどんシマドジョウの研究を進めていきたい。最後になるが、本報告を書くことを勤めて下さり、現地で多くの励ましの言葉を頂いた、斉藤憲治氏と荒井克俊氏にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

(中島 淳 Jun Nakajima: 〒811-3304 福岡県福津市津屋崎2506 九州大学大学院生物資源環境科学府附属水産実験所 e-mail: cyprin@sings.jp)

魚類学雑誌
54(1): 96-98

Shark man 矢野和成博士を偲ぶ

水産総合研究センター西海区水産研究所石垣支所に勤務されていた矢野和成博士が2006年4月4日に逝去されました。矢野さんは2004年5月ごろに右腕に痺れを伴う不調を感じ、6月に精密検査を受け脳腫瘍があることを告知されました。その後、放射線治療、2005年3月には腫瘍摘出と治療を続け、辛いリハビリにも耐えて2006年2月には快方に向かっていると聞いていましたが、3月に体のほうにも癌が見つかり、享年49歳で亡くなりました。

矢野さんは1956年4月16日に東京で生まれ、中学・高校時代は神奈川県湘南海岸で育ち、サーフィンに励んでいました。その当時はまだ、サーフィンをする人も少なく、日本では草分け的な存在であったと思われます。1976年に東海大学海洋学部水産学科に入学し、卒業研究では上野輝彌・谷内 透・望月賢二博士各位にお世話になり、魚類学研究の面白さを体験したと聞いています。その当時は上野輝彌博士が東海大学海洋学部で魚類学の非常勤講師をされており、多くの学生が上野博士を慕い魚類学の道に進んでいきました。その後、東海大学大学院海洋学研究科に進学し、故 市原忠義教授の指導の下で1982年に「駿河湾産ユメザメ属に関する研究—その分布と生態について—」という修士論文を作成し、引続き田村 保教授の指導により1986年に「日本産ツノザメ目魚類の形態、系統、分類、生態に関する研究」という博士論文を作成し、東海大学から水産学博士の学位を授与されました。彼がサメの研究をしようとした動機については彼の著書「サメ 軟骨魚類の不思議な生態」(東海大学出版会、1998年)に述べられているように、海で遭遇したサメへの驚嘆と畏怖の念であったと思われます。彼が大学院に入学した当初、なぜ海洋学部に入学しようと思ったのか聞いたことがありました。



1997年11月ニューカレドニアでの第5回インド-太平洋魚類会議時の矢野和成氏（右）と筆者

彼はサーフィンに興じていたときに、ふと将来どうしようかと思ったときがあり、自分の行っていることと関連付けて、海に関連することを勉強してみようと考えたそうです。大学院在学中は持ち前の行動力で駿河湾に面した漁港を訪れ、深海サメを漁獲している漁業者と仲良くなり、試魚を山のように自前のワンボックスカーに積み込み、研究室に持ち帰り、学生たちと夜中まで観察・計測していました。まさに水を得た魚のようにサメの採集・調査、また市原教授の計画したバイオテレメトリー調査にと惜し気なく、行動していました。1981年12月に市原教授が脳溢血で享年52歳で逝去されたときには学生代表で弔辞を読み、研究室で夜を明かして学生ともども追悼会をしました。この当時は研究室で飲む機会も多く、飲み始めると「神の水」と称して様々なアルコール飲料をどんぶりに入れて回し飲みしておりました。修士課程修了時にはサーフィンをするためにカリフォルニアにいる友人を訪ね、そのときにモスランディング海洋研究所のGreg M. Cailliet博士にもあったそうです。

1982年3月に東京大学海洋研究所で開催されたシンポジウムでの「日本産サメ類の種類(2)、ツノザメ目について」が初めての国内学会、そして1983年9月に東海大学が主催した第2回北太平洋養殖シンポジウムでの「Bi-

ological studies on Squaloid sharks from Suruga Bay, Japan」が初めての国際的な研究会での発表であったと思われま。日本魚類学会年会では1983年3月に「駿河湾から漁獲されたピロードザメ属 *Scymnodon* の1未記載種とピロードザメ *S. squamulosus* の再検討」を発表しました。その後は様々な国内外の学会に積極的に参加し、研究成果を発表していました。2004年9月に沖縄で行われた日本魚類学会年会での「先島諸島周辺海域におけるイタチザメの生物学的知見」、その直後に沖縄美ら海水族館が主催した国際シンポジウム「板鰐類研究の発展、現状と将来問題」で発表された「オニトマキエイの生物学的知見」が最後の学会発表となりました。一方、彼と始めて論文を作成したのが1981年夏に東海大学紀要に投稿した「駿河湾で漁獲されたオンデンザメ *Somniosus pacificus* について」でした。その当時はコンピュータもなく手書きの原稿や図を徹夜して作成し、朝を迎えたことが懐かしく思われます。つい最近の文献検索でいみじくも *Journal of Fish Biology*, 70(2) に矢野さんが第1著者で、サメ研究では著名なオーストラリアのStevens博士、南アフリカのCompagno博士との共著で、オンデンザメ属についての論文が発表されているのが分かり、オンデンザメには縁があったのであろうかと感慨深く思う

ところでは、彼は数多くの論文を作成しましたが、魚類学会の学会誌にはこれまでに14報の論文があり、ミツクリザメの生物学的知見についての遺稿もあると聞いています。多分、イタチザメ、オニイトマキエイについても論文を用意していたものと思われます。このように彼の調査研究・成果公表に対する情熱と責任感については彼を知る誰しもが認めるところです。

大学院修了後は、一時、米国AT&Tの海底ケーブルへのサメ被害調査に参加し、彼が研究してきた深海ザメの知識を遺憾なく発揮し、米国の研究者にも認められ、国際舞台での研究の一步を踏み出しました。その後、海洋水産資源開発センター、水産庁西海区水産研究所下関支所、そして石垣支所にて調査・研究に励んできました。その間、日本魚類学会、日本水産学会、日本板鰐類研究会、American Elasmobranch Societyなどの会員、国際自然保護連合(IUCN)種生存委員会のサメ専門家などとして国内外で活躍してきました。海外での活躍についてはIchthyological Research Vol. 54(1)に上記したAT&Tの調査で一緒になったMusick博士が詳細に述べています。また、一時、長崎大学大学院の非常勤教官として学生の指導にも当たっておりました。これから自分が行ってきた研究の更なる進展と集大成、そして後進の育成を考えていたことと思われ、若すぎる逝去でありました。彼の逝去は日本の、そして世界の板鰐類研究、海洋生物研究の大きな痛手であると思います。

彼の業績は大学院で研究してきたツノザメ目の深海ザメ以外にも様々なサメ・エイ類の分類、分布、繁殖、行動、さらに板鰐類以外の硬骨魚類、ウミガメ類、シャチなどの生態について幅広い分野にわたっています。特に、深海性ツノザメ類の分類、生態については世界の第一人者であり、FAO主催の「DEEP SEA 2003」の事前会議としてIUCNのサメ専門家グループにより開催された「Conservation and Management of Deepsea Chondrichthyan Fishes」では「Aspects of biology of deep-sea sharks」という基調講演を行いました。深海生物は採集が難しいことからいまだに分類学的な知見すら充実しておらず、まだまだ未記載種が発見されることがあります。彼は1984年にイチハラビロードザメ *Zameus ichiharai*、1985年にオロシザメ *Oxynotus japonicus*、1988年にフトシミフジクジラ

*Etmopterus splendidus*の3種を日本周辺から新種として発表しています。1980年代に東京大学海洋研究所で開催された板鰐類のシンポジウムの折に、故 阿部宗明博士がヨーロッパで開催された深海魚の会議で矢野さんらの深海ザメの研究を紹介できて頼もしかったと話しておられました。このように彼は深海ザメ類という魅力的な魚類の先駆的な研究を行いました。また、市原教授の影響を受け、海洋動物の行動にも興味を抱き、バイオテレメトリー技術を用いての板鰐類の行動解析にも力を入れていました。サーファーであったことから海に入ることは厭わず、スキューバダイビングをして対象種に発信機を装着するなど、研究室にとどまらずにフィールドで積極的に行動していました。その先駆的・行動的な研究に対し、英国ケンブリッジの国際伝記センター (International Biographic Center) から2005年世界先進科学者 (Leading Scientist of the World) として認められました。

彼はスポーツ愛好家で、研究室でのボーリング大会では常に1,2位を争うパワーボウラーでスコアが200アップすることもたびたびでした。大学院時代から相撲を中継しているときにはそれを見に必ず帰り、夜にはまた研究室に戻って研究を続けていたのが印象的でした。また、石垣島では少年サッカーのレフリーを務め、毎年8月に清水で行われる全国少年少女草サッカー大会には石垣島からチームを引き連れて来ていました。病魔に犯された2004年の夏にも清水まで遠征してきて子供たちの面倒を見ていました。彼の著書にも伺われるように家族思いの生き方、そして日々真剣勝負の生き方は彼と接した多くの人々に強い印象を与え、思い出として残っていることと思います。最近、彼の墓参りをする機会があり、墓標はサーフボードを模られ、墓は海に向かって位置していました。ここに矢野和成博士の御冥福を祈るとともに、生前の業績をたたえ、謹んで哀悼の意を表します。

(田中 彰 Sho Tanaka : 〒424-8610 静岡市清水区折戸 3-20-1 東海大学海洋学部 e-mail: sho@sec.u-tokai.ac.jp)